



# 眠り姫



烏丸 琴子

昔むかしとある小さな王国に、大変美しいお姫様がいました。

ギョロリと大きな瞳はミツバチ色で、巻き貝のように編み上げた長い銀髪は、ナメクジの通ったあのように、光の当たり方によって七色に輝きます。その後れ毛の垂れ下がる首元は折れそうなほどに華奢で、肌はカイコの吐く糸のように白く滑らかく、爬虫類のように這う緑の血管が透けています。そんなお姫様でした。

ある嵐の夜の翌朝、静かで清々しい目覚めを迎えたお姫様は、飛び起きてカーテンを翻し窓を開け放ちました。外ではちょうど真っ黒な山陰が、ルビーの朝日を吐き出したところです。窓の隅に張られたクモの巣が連ねる水滴がきらきら光るのを見て、お姫様は思います。

お城の外、森の近くの花畑にはもっと沢山のつゆが浮かんでいるでしょう。そこに注ぐ朝の光は、きっと世界中で一番きれいな宝石箱より美しいに違いありません！

簡素な白いレースのドレスを頭からかぶると、お姫様は召使い一人を連れて赤毛の馬に飛び乗り、まだ誰もいない街を駆けて花畑へと風のように走り抜けていきました。

\*\*\*

ところで、宝石は貴族と鉱山夫のものですが、眩しい朝日は全ての人のものです。

城下町の外れ、森に一番近い粗末な小屋には、少年と年老いた母が二人で暮らしていました。少年は森へ薪や山菜を探しに行くため、毎日早くから身支度を整えて出かけていきます。今日も明るい夏の日の出と共に、少年は小屋から出てきました。

彼の肌は岩山を思わせる赤褐色で、瞳はそこに眠るヘマタイトのように艶やかで濃い黒色です。しかしその目にも、木々を覆う葉の微妙なグラデーション、真っ赤な太陽、透き通る空色はやはり彩り豊かに映るのです。

彼が口笛を吹くと、小屋の陰からのっそりと一匹の雌キツネが姿を現します。

「やあ、いい朝だね」

「いつもより早いじゃない」

眠そうにしているキツネに、屈み込んで手から朝食を与えるのも、少年の日課です。

「隣のおじいちゃんが胃が痛いらしいから、薬草を探しに花畑に寄ろうと思って」  
「相変わらず、おバカさんねえ。そのじいさんが、あんたに何をしてくれるっていうのよ？」  
「君だって、僕に何をしてくれるわけじゃないだろ？」

質素な食事が終わると、キツネは少年の大きな手から顔を上げて、狭い額をさらに寄せてみせました。

「心外だわ。知らないの？ ネズミがお姫様のドレスを縫う話。キツネはもっと役に立つんだから」  
「そんなことしなくても、君はその金色の流れ星みたいな尻尾で、僕を癒やしてくれるじゃない」

少年がにっこり笑うと、キツネはそっぽを向いてしまいました。

「もっと別なことにも役に立つのに、あんたって本当にバカねえ」

一人と一匹はそんなことを話ながら、ゆっくりと花畑へ向かいました。

\*\*\*

そして少し遠ざかった朝日の下で、お姫様と少年は出会いました。二人は辺り一面を埋め尽くす濃い緑より、淡い花卉に浮かぶつゆより、お互いの姿に目を奪われたのでした。たった一目見ただけで。

お姫様は声を上げました。

「まあ、なんて美しいの！」

少年の方は声も出ません。息を飲んで立ち尽くしていると、お姫様は馬を降りて近づいて来ました。

「キャラメルみたいな肌ね。それにこの目！ こないだお父さまがくれた黒真珠なんかよりよっぽど素敵。あなた、この国の人？」

「何だか変な女ねえ。関わらない方が利口よ」

花畑の下からキツネはそう助言しましたが、少年の大きな靴にあっさりと追い払われてしまいました。

「はい、森の近くの小屋に、母と二人で住んでいます。あなたは――」

「ではあなたは私の民ね。気に入ったわ」

お姫様は、孵化したばかりのカマキリみたいに繊細な指で、少年のブロンズ色の指に触れました。そこに焼け付くような甘い痛みが走っても、少年は逃げる事が出来ません。

「今日からあなたは、私の部屋の花の世話係よ。いいわね」

まるで夢の中にいるような不思議な感覚でした。出会ったその日のうちに少年はお姫様とその召使いに連れられて、遠くからしか見たことのなかったお城へ迎え入れられることになったのです。

花の世話係として働くために、少年は全身の体毛を全て剃り落とされました。彼の太くもつれた黒髪は、お姫様には美しく見えなかったからだそうです。でも少年は気にしませんでした。これから毎日、あの美しいお姫様のそばで暮らすことができるのですから。股間が多少痒くとも、美しい未来に少年の胸は踊ります。

しかし日々が過ぎるごとに、お姫様の美しさは輝きを失うのでした。いや、お姫様は何も変わってはいません。ただ少年は、小屋に残してきた老いた母親と金色のキツネが気になっていたのです。

ある日華やかな花瓶の隣でため息をついていると、お姫様がやってきました。

「どうしたの、元気がないわね。食事がご不満？ それともその服、美しくないかしら？」

「いいえ、お姫様の好意には感謝しています。でも母と友達のことを思うと、とても寂しい気持ちになるんです」

「まあ……」

お姫様はしばらく言葉をなくして、ツルツルになった少年の頭を撫でていました。

「美しいお前が悲しんでいるなんて、私には耐えられないわ」

そしてお姫様の計らいで、城内にはすぐに少年の母親とキツネのための部屋が用意されました。美しいだけではなく優しいお姫様に少年は心から感謝し、初めて会ったときよりも眩しい輝きを感じました。

しかし実際に城に入れられたのは、キツネだけだったのです。

「お前の大切なお母様だと分かってはいたのですけど……」

お姫様は悲しげに目を伏せ、遠慮がちに言葉を選んでいるようでした。そしてそのうちに、わっと顔を覆ってしまいました。指の間から、魚の産卵のように透明な粒がこぼれていきます。

「どうしても、美しくは見えなかったの。私、自分の美しいと思えないものが近くにあるなんて、耐えられない」

城に迎え入れる代わりにと、お姫様は母親のためにお気に入りの女召使いを一人と、毎月の生活費を送ってくれました。それでもさめざめと泣くお姫様を前に、少年は、すべては彼女の優しさと気高さが彼女を傷つけた結果であると考えました。そして余計に、お姫様のそんなところを愛しいと思いました。

次に泣いているお姫様を見たのは、数ヶ月後のことでした。

「結婚なんていやぁ！」

丁寧に編み上げられた七色に輝く銀髪を振り乱し金切り声を上げながら、お姫様は廊下で泣き崩れていました。彼女をなだめようと集まった侍女たちは、お姫様を抱えて上げて部屋へ連れていこうとしています。しかしお姫様は背中をうんと反らしながら、柳のようにしなやかな腕を振り回して暴れていました。

「どうしたんですか？」

少年が尋ねると、お姫様に引っ搔かれた侍女の一人がやって来て耳打ちしました。

「姫さまのご結婚が決まったのです。その、例の国の……王子と」

彼女の含みを帯びた言い方で、少年にはすぐにピンと来ました。その王子とはプリンスとはとても呼びがたい（しかし間違いなく皇太子なのですから、他に呼びようがない）、太って髪も薄い、油光する中年男です。その上多数の側室を持ちながら、なぜかなぜか世継ぎのできない不思議な王子様なのでした。美しいものしか愛せないという気位の高いお姫様には、もちろん耐えられるはずがありません。

「ああ嫌！　すべてをあの醜さに飲み込まれるんだわ……全部！　奪われるのよ！」

「ついにこいつも年貢の納め時ってわけね」

お姫様の絶叫が響く中、キツネがやってきました。

「いけ好かない女だと思ってたのよ。いやね、あたしだって人間なんかには懐かないけど、あなたの母親には世話になったからね、義理くらいは感じてるのよ。あの人から一人息子を奪ったんだから、天罰が当たったんだわ」

「そんな言い方をするんじゃない！　お姫様はお前にだって良くしてくれたし、母さんにだってそうだ！　お前こそ、母さんに何もしてくれなかったじゃないか、役立たずの女狐め！」

少年に怒鳴られると、キツネはつまらなそうに肩をすくめて、のっそりと去って行きました。少年もキツネのことなどは忘れて、一生懸命お姫様を慰め続けました。

そしてお姫様が泣き止むことはなく、朝はやってきました。

\*\*\*

生い茂った夏の梢の隙間から朝日がこぼれる中庭で。少年が口笛を吹くと、やっぱりキツネは現れました。

「まだあたしに用があるなんてね」

「昨日のこと、怒ってる？」

「怒ってたのはあんたでしょ」

いつもの通り少年の手から食事をもらおうと、キツネは満足そうでした。

「僕が悪かったよ。君はたった一人の友達なのに、ひどいこと言ってごめん」

「友達だとは思っちゃないわ」

「でも僕に手を貸してくれるのは、この城じゃ君だけだ」

「なんだ、あたしを利用するために呼んだわけ」

「違うよ、仲直りしようと思って――」

「あんたももうメルヘンの主人公じゃないってわけね。それで？」

少年はばつの悪そうな表情で、キツネの隣に腰を降ろしました。

「僕、お姫様のために、美しいものを探したいんだ」

醜い王子に嫁ぐお姫様を慰めるために、少年とキツネは毎日城の外を探しました。花畑や森や山、湖、少し離れた浜辺。一人と一匹は出かけて行っては思い思いのものを持ち帰りました。

しかしどんなに美しいものも、その背景から切り取られると長持ちせず、その美しさは失われるのでした。これではお姫様の心を慰めることができません。

「仕方ないのよ。花から大地を、魚から海を奪っては、美しさも死んでしまうんだから」

「じゃあお姫様から美しいものを奪ったら、お姫様も死んでしまうね……」

城下街を一望できる丘の上で、一人と一匹は並んで暮れていく夕焼けを眺めていました。明日お姫様は結婚して、醜い王子の城へ行ってしまいます。

「この色をすくうことができたなら、これをお姫様にあげるのに」

「太陽も星も月も、雲が邪魔して見えないこともある。そうでなくても時間が、全部を押し流してしまう。永遠に変わらず美しいものなんて、ないんだわ」

少しの間静かになって、少年は呟きました。

「お姫様の優しさは、きっと変わらず美しいよ」

「そうかしら」

「僕のお姫様を思うときの気持ちも、きつときれいだよ。お姫様は僕を美しいと言ってくれる。僕がずっとお姫様のそばにいれば、守ってあげられるかな」

キツネは狭い額をさらに狭めました。

「バカね。あの女があんたの母親をなんて言ったか忘れた？ 美しくないって言ったのよ。あんたも同じ。年老いたら放り出されるわ」

「そんなの、耐えられない」

か細く、少年は囁きました。

「それなら……」

長い沈黙の後、少年は小さなナイフを抜きました。稜線に溶けていく陽は足掻くように、その中で赤く燃えています。

「あたしの毛皮でも剥ぐつもり？」

「君の毛皮を剥げば、その美しさは死んでしまう。でも、気持ちはどうだろう」

少年は、真っ赤な刃に映る自分の暗い瞳を見つめました。夜の闇よりもずっと濃い黒を、お姫様は美しいと喜んでくれました。

「僕がもしここで死んでも、僕の気持ちは傷つけられない。それどころか、時間に損なわれることもないんだ、老いたりなんかしない！ この気持ちを今のまま、お姫様にあげるよ。そしたらお姫様は、僕の気持ちを見るたびに慰められる。お姫様は死なない」

そう言って、少年は自ら胸を切り開こうとしました。キツネは慌てて叫びます。

「やめなさい！」



そして少年の手元に飛びかかりナイフを奪うと、それを少年の足元に置きました。

「バカ！ 本当に、あんたってどうしてそんなにおバカさんなのかしら！ いい、人の気持ちってというのはね」

悲しそうにキツネを見下ろす少年のため、キツネは教えてあげました。

「胸じゃなく脳にあるのよ」

「ああ、そうなの！」

少年は目を丸く見開いて、そして微笑みました。

「本当だ。キツネはとっても役に立つんだね」

そうして盛大な結婚式が終わり、お姫様は疲れた体で新しい生活のために与えられた部屋へ入りました。美しいカーテンで飾られた窓辺には、グレーがかった薄桃色の物体が置かれています。

カエルの背のようにぬらぬらと光るそれは月光に当たると幻想的で、しばらくは飾っていましたが、次第に異臭を放つようになったため新しい召使いに言って捨てさせました。

召使いと言えば、お気に入りだった一人を見かけなくなりましたが、お姫様はあまり気にしませんでした。王子様が美しいお菓子や絵画や宝石を次々にくれるので、お姫様はついに眠りから覚めたのです。

本当に大切なことは見た目の美しさではなく、目には見えないもの——真実の愛だと。

そしてお姫様と王子様は永遠に、幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし。

【眠り姫、あるいは乙女心 おしまい】